

家族と私 一心のよりどころ

B-5 徐 曉雯 (ジョー ギョウブン)

1. 家族の紹介

世の中には数え切れないほどのコミュニティがある。大きくても、小さくても、人によって意味が異なるかもしれない。しかし、一番大切なコミュニティと聞かれると、思わず頭に思い浮かべるのは家族のイメージだ。なぜかというと、直接的な交流ができ、信頼に満ちた場所として、いつになってもどこにいても自分と深くつながっているからだ。

家族は4人で一緒に暮らしている。普通の会社員としての父は毎日真面目に働き、一家4人の生活を支えている。平凡といえば平凡だが、私にとっては山のような存在である。迷ったときでも、悩んだときでも、私の後ろに立って、黙々として励ましてくれている。母は仕事の以外に、家事、子供の勉強に気を配り、大変な毎日を送っている。時にぶつぶつであっても、母がいないと、生活は全然できない。

現在の中国の一般の家庭と違って、私は人っ子ではない。私より九つ年下の妹がいる。たぶん、妹がいるからこそ、私の生活には何かが変わった。一緒に朝寝坊したり、いやなこと文句を言ったり、本屋さんに行ったりして、一人としての孤独感がいつの間になくなってしまった。大学に入ってから、西安に戻るたびに、妹は必ず一人こっそり泣くということを母から聞いたとき、嬉しいか、悲しいか、はっきりいえない気持ちだ。普段はいつもけんかするといっても、愛というものはいっぱいある。愛されてよかったと思う。

家族4人で作ったコミュニティは普通で小さいものの、愛に溢れ、気楽に付き合い、ごまかす必要がなく、何でも話せる温かい場所である。特に、留学しているので、一人暮らしの寂しさと辛さから、家族の大切さは一層強く感じた。

なんといっても、家族は私にとって、過去も、現在も、将来も、一番大切なコミュニティである。このコミュニティの一員になったのは何よりも嬉しいことだ。

2. インタビュー相手

家族といったコミュニティには、父、母、妹と私4人しかいない。インタビュー相手として、私は父を選びたい。

もちろん、父はお父さん、主人としての役割をしている。生活の負担を受けて苦勞して、このコミュニティのリーダーといっても過言ではない。いつもしっかりしていて、何でもできるような気がする。私の理科の宿題を手伝ってくれたのはもちろん、電化製品の修理などもできる。実は小さいとき、父の愛というより、むしろ母のほうが強く感じられた。父は口が重いイメージを与えたからだ。それに、当時のわがままな私は父にしかられた場合も多かった。しかし、年齢を重ねるにつれて、父に対する思いも変わってきた。「一体いつになったら自立できる？」としかる一方、帰るたびに「いつ到着？ 出口にいるよ。」と書いてあるメールを送ってくれる人、「変だな！」と私のコーディネートにコメントする人、「閉じこもるな、外を出て！」と自然に触れてほしい人、「これさえできないの？」と言いながら、料理の作り方を詳しく教えてくれる人…

なぜ父をインタビュー相手にするかというと、父の立場からしてみると、生きていく基盤としての「家族」について、どう思っているかを知りたいからだ。親子の視点、男女の視点、何か違うことがあるはずだ。私は今まで、父とこのような深い話題をしたことがない。この授業をきっかけに、父からアイデアをもらいたい。

3. インタビューの結果

12月4日23時10分から23時30分まではQQというチャット道具で、12月5日の22時15分から22時45分まではSKYPEで、父とインタビューをした。はじめは、インタビューの願いをしたとき、父の話から思いがけない感じがあるというより、むしろ緊張だった。「話すのが下手だな。何も話せないし…」「大丈夫だよ。何でもいいよ。」と返事して、安心させた。それで、インタビューは気楽な雰囲気に進んでいた。

家族に対するイメージと理解

「家族って、私ね、一番親しくて、大切なコミュニティだと思うよ。父はどう？」と質問されて、父は少し沈黙して、約10秒後返事がやっと来てくれた。「一日の仕事を終え帰ると、疲れがすぐなくなって、おいしいご飯も出来上がって、何があってもぐっすり寝るところだな」と最初の答えだった。「まあ、家族っていうと、それだけではなくて…」と話を続けていた。「毎日会える人。毎日暮らしている場所。それでも、飽きたっていうのは全然ない。いつまでも離れられないよね！一生の幸せね！」と父の素朴な話から以外のポイントも得た。

自分の家庭を作ったからの生活変化

「もっと幸せになってきた。あたりまえのことだよ。」その時の父は何も考えせず、「家庭が作られてから、何か変化がある？」に対する答えが直接にきた。父の話によると、子供が生まれたことは人生の最大の幸福だそう。そのごろ、職場から帰ったとたん、赤ちゃんの私を抱いて、私のことに気をかかった。「でもね、必ず泣いている毎日。」と言いなうが、「二人の娘がいてよかった。同僚はとてもし羨ましいよ。円満だね！」このような話は父からはじめて聞いたのだ。

その一方、言うまでもなく、家族のために父としての責任が一層重くなるに違いない。特に、妹が生まれてから、父は以前よりもっと苦労しているのは直に見たものだ。

家族が生きていく鍵

家族抜きでは、人生の円満は描けないと思う。では、家族はどのようにつながって生きていくか。父が思っているとおり、肉親の情、理解、交流、お互いの助けは家族にとって欠かせないものだ。これらがあったおかげで、家族はどんな困難があっても、乗り越えられて、スムーズに進むようになるのではないだろうか。

娘たちへの期待

聞いたことがなくて、本当に知りたい問題だ。たとえどんなに一人前でなくても、何か望んでいるものがあるはずだと思ったけど、ただ「無事な毎日を送ってほしい。」と言ってくれた。「それだけ？ありえないよ。うそじゃない？」冗談みたいなことに対して、あまり信じられないので、疑問を出した。その時の父はただ笑った。「もちろん、いい仕事を見つけてほしい。いい結婚相手を見つけてほしい。でも、いくら立派になりたいのはあなた自分のことだろう。親としては、毎日の無事生活を祈るのだよ。」書いている途中で、最近のことも思い出した。12月7日の午後、秋田にも地震の影響を受けた。震度は高くないが、一瞬は本当に怖かった。約20分間後、国内の電話がきたのは思いもしなかった。安全確認の話を知ったら、胸がじいんと熱くなった。

今度のインタビューは思っていたより楽だった。これを通して、平凡な父から貴重な経験を手に入れて、大変勉強になった。家族はいつまでもそばにいてくれて、心のよりどころのような存在であると確信した。

4. 家族と私

家族というのは、確かに一言ではっきり表せないのだろう。消えない血のつながりがあ

るので、父が言ったように、家族は生まれてから、いつまでも離れられないのだ。どんなときであっても、そばに助けてくれたり、元気を与えてくれたり、何でも正直言えたりする場所といっても過言ではない。たぶん、これは家族以外の人にいたるところではないのだ。これは心のよりどころとしての家族の特別な魅力といえるだろう。

家族の一員として、もちろん家族のために何をすべきだ。もう大人になった私は今一番努力したいのは親が心配をかけないぐらい独立するということだ。特に、今日本での一人暮らしをちゃんとでき、親に安心させようという気持ちは一番強い。来年卒業して、仕事を見つけて、親の苦勞を減らしたい。それに、親の代わりに、妹の面倒を見て、長女としての責任を尽くしたい。感謝の気持ちを含め、お互いに支えていく精神を続けていきたいと思う。

私の家族は世の中にごく普通の一つである。しかし、この普通さから学んだものはきっと自分将来の家庭作りにも役立つ。

5. クラスについての感想

「〇〇と私」というレポート、実は中国にいたときも書いたことがある。そのときは、ただ2、3回の討論を通じて、一気にレポートを書くのだった。なんだかつまらなくて、大変だった。その一方、今回取ったのはまた「〇〇と私」を中心としたレポートの書く授業であっても、グループ活動の形で授業を進み、話し合いの時間がたっぷりあり、散歩の見学もあったので、面白くて、特別な感じがあった。一気にレポートを書く代わりに、徐々に書いていくので、あまり負担ではないと思う。それに、はじめはみんなに自分が書いたものを見せるのは恥ずかしいと思ったけど、実際は本当にいい経験だった。質問して質問されて、他人からアドバイスをもらって、書き直しやすくなって、レポートに大変なためになった。もっと重要なのは、インタビュー相手がいるおかげで、気づかないところが見つけられて、自分にも一層深く考えさせた。それがなかったら、そこまでの深い認識ができないのではないだろうか。

先生は非常に優しくて、時間、話し合いの話題、毎回書く分量などもしっかりと計画をして、改善してほしいところといえば、実はあまりないと思う。しかも、この前、グループを分けたとき、選択肢に基づいてグループの作りは特別だが、少し複雑ではないかなと思う。初めての私にとって、「どうしてこうやる」と一瞬迷うってしまった。もし、何の目的を求めるのかなどをもっと詳しく説明してくれれば、もっといいと思う。